

マイムにふさわしい筋書きがあるとすれば発展と変化しかない。その動きは一週間が流れるように流れていく。月曜日に続いて火曜日というように。まとまったその動きは季節のように過ぎていき、工場の流れ作業のように運ばれていく。一つの端から始まって、もう一つの端で終わるのだ。だが、それを引き立てるのは表現作法(manie're)である。人の性質は偏屈になったり頑固な物質主義になったり、忘れっぽく、かといって忘れても良いことをしつこく覚えていたり、怠惰であったりする。それなのに許すよりは復讐心のほうが強くパニックにおちいりやすい。振り返ることをしないで前に進もうとし、しかもよく見ないので自己中心的になって、他者を殺すことがわが身を殺すはめになる。マイムがこうした事をあらわにして見せるのは、行為そのものや、動きや、びっくりするような出来事によってではない。それは表現作法(マニエール)によってなのだ。与え方は与えようとするものよりも価値がある。歩き方はその行き先より価値があり、摘む技術は花よりも価値がある……。数え切れないほどの物ごとそれぞれに技術(アール)があり、それが行為となるのだ。

「マイムの言葉-思考する身体」 エティエンヌ・ドゥクルー 1998年 ブリュッケ
p.160 作品の上演 1954年

